

春秋

NHKのEテレ「ココロ部」を見る機会があった。道徳の授業向けの番組で、小学校高学年から中学生が対象である。タレントらが寸劇の中でさまざまなピンチに遭って、解決法をともに考えていく内容。ネットでも視聴でき、休校中の課題とする学校もあるらしい。

▼たった10分間の部活動だが、場面設定は多彩で中身も濃い。例えば「こまったプレゼント」と題した回には、夢かない、しゃれた洋菓子店を開いたパティシエが登場する。その店へ親友が祝いの品を持って訪れた。見れば何と手作りの巨大なテングの面。店の雰囲気と合わず、店主は扱いに困ってしまう。さあ、どうする。

▼「おくれた客」では「決まり」がテーマだ。最終日を迎えて閉館した絵の展覧会場に高齢の女性が現れる。荒天で列車ダイヤが乱れたといい、警備員に「見たかった」と嘆く。亡き夫との思い出の絵で、自身も死期が迫っていると告げられ、警備員は規則を貫くか、願いをかなえるべきか迷う。番組は正解を示さない。

▼答えの出にくい設問はウイルスと共生する今後の社会にも待ち受けていよう。実際、しばらくは「感染予防と経済の活性化」「監視強化か自由か」といった矛盾をはらんだ難題に向き合わされそう。入り乱れる利害を調整し、時に思いやりを持ち対処する。「ココロ部のOB・OG」である我らの選択を子どもが見ている。

春秋

オフィス、通勤電車、繁華街……。新型コロナウイルス禍は私たちの周りの景色を大きく変えた。路上もそうである。警察庁によると4月中旬に全国で起きた交通事故は2万8055件で、前年の4月に比べ36%減ったという。外出自粛がもたらした成果と言っているいかもしれない。

▼では交通事故による死者の数も同じように少なくなったかというところではない。4月の死者は213人で、減少率は2割ほどにとどまる。東京や大阪、愛知などでは逆に数が増えているというから驚く。道路がすいて渋滞もなくなり、ついスピードを出したり、注意力が散漫になったり、といった事情があるようだ。

▼「魔の7歳」という言葉がある。歩行中に車にはねられて死傷した人を年齢別にみると、7歳が突出して多い。人口あたりでは全年齢の平均の3倍以上にもなる。そして小学生の死亡・重傷事故がもっとも多い時期は5月。学校に通い始め、ひとりで外に出る機会が増えた子どもたちが事故の犠牲になる現実を改めて思う。

▼多くの地域で緊急事態宣言が解除となり、学校再開の動きが始まっている。この間に私たちはいろいろなことを学んだ。自粛生活が明けた後、子どもが事故に遭つた「魔の5月」が6月や7月にずれこんだだけ、という愚は避けたい。子どもたちを輪禍から守る。コロナ後の新しい生活様式に、ぜひこの一項目を明記しよう。

編集手帳

投資家で数々の若者向けビジネス書を書いた瀧本哲史さんは昨夏、病のため47歳で亡くなった。近著『2020年6月30日にまたここで会おう』

(星海社新書)は8年前に東京大で開いた講義の模様を採録した一冊である。弱者こそ交渉という名の武器を持つ。最初に学ぶべき教養は言葉だ。言葉で仲間を増やし、ルールや空気を変えていく。まず言葉マニアになってほしい。自らの頭で考え、行動することの大切さが繰り返し語られている。◆客員准教授を務めた京都大でも医学部

生から工学部生まで授業はいつも超満員だった。「ユニクロのCMの今と昔の違いは」「もし無敵カフェを開くとしたら」。トピックを掲げ議論を重ねる。教室は濃密な熱気に包まれていたそう。◆人ごみまで影響を及ぼすか気がでない。先行きが見えず不安だ。先般、気流欄で二十歳の大学生の投書を読んだ。同じような憂いを一人抱え悩む学生はどれほどいるだろうか。今、会話や議論の要を改めて思う。◆再会の約束は果たせなかつたけれど、瀧本さんの遺伝子を届けたい。編集者はそう願う。先の本を編んだのだという。

編集手帳

涙はしょっぱい。でも悔し涙とろれし涙では、微妙に味が変わってくる。うた◆ある雑学本によると、体内で使う神経が別々であるらしい。悔し涙

は交感神経が働いて水分が少なくなるため、味が濃くなる。うれし涙は副交感神経が水分を多めに出すことから、薄味になるという◆どちらの涙があふれた日々だったかは言うまでもあるまい。大切な家族を失った人、廃業した経営者、家賃の支払いや食費に困り果てた人、目標としたスポーツ大会をなくした若者たち。苦しむ人々を書けば、

当欄のスペースではとても間に合わない◆首都圏と北海道の緊急事態宣言が、週明け25日にも解かれる可能性が出てきた。かといって、すっかり見慣れた日本地図の色分けがなくなるだけで、国民の心や経済が負った傷は深い。まだ明るい気持ちにはなれないものの、少し前を振り返ればどうだろうか。人との接触を8割減らし、感染を抑え込む。そんなことが本当にできるのかと、いぶかったのを思い出す。案外、私たちはすごいかもしれない◆心を折らず再生へとかじを切ろう。しょっぱさは薄い涙を流せる日を待とう。

私にはなんとか驚かせたい人がいる。米カリフォルニア大学サンタバーバラ校の中村修二先生だ。2014年に青色発光ダイオード(LED)の開発でノーベル物理学賞を受賞された。その後も研究成果を生かして企業を設けるなど、技術の第一線で勝負を続けている。

ロームで半導体材料の研究チームを率いていた06年、共同研究先として米国を訪ねたのが出会い。衝撃を受けたのは判断のスピードだ。別の材料を使った方が開発が進むと見れば、過去の成果を捨ててその日のうちに研究室ごと方針を変えて、日本では見ない大胆さに感嘆した。

私にとっては経営の師でもある。「米国内なら大学で会社経営もできる。材料工学の最先端に来たらどうか」と誘われ、08年に先生の下で米大の研究員になった。論文のための実験はせず、社会に何を生むための研究なのか、先生は常に本質を問う。2年弱の在籍だったが、研究に閉じず社会に役立つことの重要性を中村研究室で教わり、その後コンサルティングや企業経営の道に進むことになった。

昨春秋に会うと「ドローンの会社はどうか」と質問攻めにあつた。先生が驚くような技術の種を見つけたら、いつかまた共同研究をできないか。そんな夢が私の励みになっている。(おおた・ひろあき 自律制御システム研究所社長)

2020. 5. 26

春秋

漫画家の手塚治虫さんが、自らの戦時中の体験を「紙の蜂」という作品に残している。大阪の旧制中学で軍事教練に明け暮れる日々。書きためた絵を動員先の上役に破られ、時に敵機の偵察にかり出されたり、大空襲で炎の中を右往左往したりと極限の青春が描かれる。

▼そして迎えた8月15日。戦争に負けたこの時に街へ出た。焼け残った家に明かりがともる光景を目の当たりにする。敵の来襲に備えた灯火の制限がなくなったのだ。思わずパンザイをした。「ウワー終わったー」。往時の手塚少年ほどの解放感ではないにしても、昨夜はあちこちで小さな歓呼や深い安堵が聞けたであろう。

▼ひと月半を超えた新型コロナウイルスに関する緊急事態宣言が全面的に解除されることになった。飲食や宿泊、運輸をはじめ影響が及んだ業種は広く、傷もかなり深い。休校は長引き、授業や学校行事も滞った。それでも数多くの人たちの忍耐や思いやりが積み重なって、この日を迎えられることは少し誇らしくも感じる。

▼だが、ウイルスは生き残るため、悪知恵にたけた戦略家に似た振る舞いをする。第2波への警戒や「新しい生活様式」の定着など手を抜けない課題も残る。治療薬やワクチンの開発も急がねばならず、戦いは始まったばかりなのかもしれない。「終わったー」と手放しで喜べる日はまだ先、と気を緩めずいたい。

編集手帳

数の倍々ゲームが想像を絶した膨張にいたる不思議は、日本にも親しまれた小話がある。感染爆発への懸念が生じた当時、まず頭に浮かんだのは豊臣秀吉の御伽衆、曾呂利新左衛門だったことを思い出す。多くは後の創作らしいが、とんち話や落語などで伝わる。褒美に何が欲しいかと聞いた秀吉に、新左衛門は「今日は米一粒、翌日は2粒と日ごとに倍の数の米をください」と答えた。「なんと欲のないことか」。秀吉は喜んだ。だがこれを続けると、そう遠くない時期に蔵の米が足りなくなるほどだと気づき、別の褒美に変えさせたとか。約1か月半に及んだ緊急事態宣言が全面解除された。生活者として、あるいは経済を支える働き手として、慌ただしく激変を受け入れながら我慢や苦しい決断をした日々が一つの区切りを迎えた。ほんと長かったですね。感染の暗雲が迫る頃、当欄で新左衛門に触れるのをやめたのは名字にある。人気お笑いタレントの狂言師のモノマネが耳に響いてきたためだ。今なら時宜を得たのではないか。そろり、そろり。慎重に、でもほがらかな気持ちも持ちつつ明日に踏みだそう。

2020. 5. 26

編集手帳

感染症と奮闘する、政府の専門家会議の副座長、尾身茂さんの発言を紹介させていたたく。「皆が病院に行けば、病院が最大の感染場所になる。人の動きを制限し、自宅待機や学校閉鎖を我慢してもらえよう。政治家が訴えてほしい」◆新型コロナウイルスの流行を経験した今読めば、「何を今更」と思う方もいるだろうが、2008年2月、感染症対策について国会議員に講演した際の訴えだ。当時の読売新聞にある◆外出自粛や休業要請が長引き、不満を持つ人は多い。専門家からすれば、長年、対策への理解を求め努力の重要性を訴えてきたのに、政治はその責任を果たしてきたか、と問いたくなるのではないか◆先日の国会審議で、野党の幹部が、参考人として出席した尾身さんを激しく攻め立てた。感染収束に向け、与党も野党も知恵を絞るべきだろう◆著書「WHOをゆく」で、尾身さんは「治療薬やワクチンがなければ、19世紀的古典的手法に頼らざるを得ない」と説く。古典的手法とは、感染者の隔離と接触者の追跡だという。日本の対策は正しいのかどうか、答えが出るのは当分先かもしれない。

2020. 5. 25

慶応義塾大学に進学し、マスコミの記者を目指して毎月学生向けの新聞を出す「慶応塾生新聞会」に入った。そこで出会ったのが倉重公太郎君だ。経済学部の同期で、ノートの貸し借りをした。

2002年夏に短期留学プログラムで一緒に米国に行った。現地では「日本の踊りを教える」と言われ、彼は先陣を切って先日新型コロナウィルスで亡くなった志村けんさんの「変なおじさん」を披露した。あたかも日本の伝統の踊りかのようになり、参加した約40人みんなで踊った。

彼がすごいのは、司法試験の勉強の真つただ中に「気晴らしだ」と留学に参加したところだ。集中力と根性が人並み外れている。その勢いで弁護士になった。私はNHK記者として北海道を拠点とし、その後には衆議議員になった。

彼は労働法制度の専門家、企業側の弁護士として活躍する。私の政治的な立ち位置はどちらかといえば労働者側。異なる立場で時には激論になるが、近ごろ同じ方向になるテーマがある。テレワークの推進だ。彼は人事評価の視点などで意見を言う。私は大都市の過密化を憂え、地方で働く環境をつくれと期待する。40歳代はこれからの社会をどうするか考える中心世代だ。互いに刺激し合う価値ある関係性を大事にしたい。(やまおか・たつまる 衆議議員)

春秋

かつて上方落語の人気者が、野球賭博で摘発された。刑事さんに「暴力団の資金源になっている」と説諭され、こうつぶやいたそうだ。「わし、トータルで勝ってますさかい、暴力団の資金を吸い上げていっていることですわ。表彰状もろてもええんとちやいまっか」

▼多くの後輩芸人が語り継ぐ伝説だ。言い訳もここまでくれば芸である。新型コロナウィルス禍のさなか、「3密」のパチンコ店に一時、客足が絶えなかった。テレビのマイクを向けられた関西のお父さんは、「自粛ムードのなか、息抜きも必要ですわ」と弁明していた。果たして気分転換なのか。依存症のようにも見えた。

▼パチンコの市場規模は20兆円。一大産業だ。射幸心をあおるキャンペーンとの見方もある。だが、出玉をいったん景品に交換したうえで現金化する方式により、賭博ではなく「遊技」だというのが政府の見解だ。スッキリしない気持ちも残る。確かに戦後、庶民に親しまれてきた娯楽だ。お上のありがたい温情というところか。

▼これもお目ごほしか。きのうの衆院法務委員会。賭けマージャンで辞職した黒川弘務前東京高検検事長を訓告処分にとどめたことについて森雅子法相は、「多大な貢献があった」。質疑では「役満賞」「チップ」などの用語が飛び交い、政治漫談を見ているよう。ここはひとつ、ご本人から膝を打つような釈明が聞きたい。

編集手帳

沖繩に何回か取材に出かけている。都会のように電車が隅々に走るわけではないので、タクシーを時間借りすることが多かった◆そのうち一度は道すがら観光案内をしてくれるほがらかな運転手さんだった。海岸沿いに出てグリーンが海が広がったとき、運転手さんが「ここぞとばかりに飛ばしたダジャレが忘れられない。「お客さん、沖繩の海は、エメラルド度が高いでしょ？」◆本紙オンラインで、ヘリから撮影したエメラルドグリーンに輝く海の写真を見た。かつての旅を思い出して独

り笑いすると同時に、驚いた。神奈川県鎌倉市から横須賀市にかけての海岸だという◆南国の海に起こる現象「白潮」が相模湾で今月初旬に確認され、長く続いている。海水温が高いことから植物プランクトンの円石藻が発生し、「エメラルド度」を高めているらしい。今のところ漁業に影響は出ていないと聞いてほっとするものの、豪雨災害の多い近年の南国化には穏やかなわぬ場所の南国化には穏やかな気持ちだけではいられない◆これ以上災いが重なることは耐えがたい。やさしい夏に、通り過ぎて行ってほしいものである。

春秋

「残念コーデ」なる言葉を聞いた。残念なコーディネート、つまり、頑張っているけどヤボったい替なしのことを言うらしい。いままでの「残念」の使い方の典型だろう。もともととは心残りなこと、くやしきことを指す言葉が、すっかり別の意味を伴うようになった。

▼高学歴でやる気満々だと話が面白くないのは「残念な人」。あれこれ書きを並べるわりには味の良くない「残念な店」。つまり、意欲が空回りしているのが昨今の「残念」である。ならばコロナ禍のなかでいちばん残念なものといえば、もうすっかり有名になった「アベノマスク」か。それがついに、当方にも届いた。

▼さっそく着けてみれば……。ガーゼの質は良いが、うーん、やはり小さいなあ。鼻を隠せば顎が出る。顎を覆えば鼻がはみ出す。口を動かせばずれていく。数百億円も投じてもったいないという批判を思い出す人は多からう。「みなさまへ」と呼びかける同封の手紙の書き出しは「緊急事態宣言が出されました」。うーん。

▼それでもまだ割ほどしか配り終えていないという。いよいよ残念な策だが、そうこうしているうちに、世間ではおしゃれなマスクが多々登場してきた。夏にはユニクロでも売り出すぞうだから、マスクコーデもファッションになるに違いない。さてそんななかで、アベノマスクの存在感は……。レトロ感で勝負だろっか。

お姉ちゃん 星 奈津美

交遊抄

人と話す時は、大抵聞き役。仲の良い相手でない、2人きりで会うのは得意な方ではない。そんな「少女奥手」な性格の私が、自ら会いに行つては知らず知らずのうちに話し込んでしまふ。卓球元日本代表の平野早矢香さんは、私にとつて「お姉ちゃん」のような存在だ。

2012年ロンドン五輪の頃から面識はあったが、6歳年上なこともあり、当時はあいさつ程度の関係だった。距離が縮まったのは2年前の夏。引退後、テレビ番組で見せる平野さんの明るいキャラクターとトーク力にひかれていた私は、共通の知人が食事することを知ると、思わず「会つてみたい」と申し出ていた。

以前、所属企業を退社する際には「どうなった」とこまめに私を気にかけるメッセージを送つてくれた。そんな居心地のいい空気につられ、仕事の相談にも度々乗つてもらつていた。最近増えている講演会の依頼についても「嫌じゃないならどんどんやっただほうがいいよ」と私の背中をポンと押してくれる。おかげで他の仕事にも生き、テレビの解説では言葉がよどみなく出るようになった。

ふとした時に連絡して甘えられる、私にとって唯一無二人の人。「一緒に行きたいね」と話していた映画とカラオケ、早く実現させないと。(ほし・なつみ)五輪大会運搬機氷銅メダリスト)

編集手帳

SF小説の古典『透明人間』(H・G・ウェルズ著)の科学者は、悪さを目的で自らの体が見えなくなる薬を飲んだのではなかった◆単に失踪して厄介ごとから逃げるためだったか、かねて心にくすぶつていた不満やプライドの高さが行動を変質させ、激化していく。盗みや傷害にとどまらず、果ては殺人へと◆怖い部分のみを言えぬ、透明人間とSNSは同じだろう。匿名で人の家に忍び込み、壁や柱：住人がいやおつなく目にする場所に、「消えろ」「お前の顔なんか見たくない」と落書きすることがいとも簡単に見える◆悲劇が起こった。毎日100件もの誹謗中傷が押し寄せたことが、女子プロレスラーの木村花さん(22)を自殺に追い込んだとみられている。どれほど傷ついたことだろう。視野に飛び込んでくるすべてが、自分の悪口になっていったはずである。表現の自由は人を死なせるためにあるのではない。生きる権利を脅かす誹謗中傷への抑止策が早急に必要である◆身元を特定され責任を問われるのを恐れてか、投稿者らは問題の書き込みを次々に削除しているという。ひきょうだぞ、透明人間たち。

編集手帳

数日前、今年初めてツバメを見た。ヒューと頭上を横切り、駅の商業ビルの看板の上にとまった。思わず有名人を見つけた高校生のように携帯を取り出し、写真を撮つた◆枯れ草を一本くわえていた。古い葉が見当たらないところを見ると、一から子育ての場所を作るつもりらしい。だがそこは商業ビルの自動ドアのすぐ上でもある。糞害の苦情が出ないか、少し心配になる◆オスカー・ワイルドの童話を思い出す。町の高い円柱の上の「幸福な王子」と呼ばれる立像が、高い所から町を眺

めていると、かわいそうなことが起きてるのが分かり、涙を流す話である◆そばにいたのがツバメで、王子の目となつていた宝石や体を覆う金箔をはがして不幸な人に届ける役を引き受ける。世情、いろいろな施策が後手に回り、必要な人に支援がスピード感をもって届かないと聞く。大空をすいすいと軽やかに飛ぶツバメを見ていると、複雑な心持ちになる◆ところで果作りはどうなっているだろう。商業ビルは営業を再開し、自動ドアには人々が行き交うに違いない。無事を願う。ツバメは昔から、幸福の使者といわれる。